

本の紹介

蟹澤聰史 著「石と人間の歴史」中央公論新社、257p、
2010年11月25日発行
820円（税別）、ISBN978-4-12-102081-9

「村上春樹のエッセイや紀行文は好きだけど、小説はどうも…」という声を見聞きする。そのような層に人気の『遠い太鼓』（講談社）に収められた「文庫本のためのあとがき」は、以下の文で閉じられる。

「旅行というのはだいたいにおいて疲れるものです。でも疲れることによって初めて身につく知識もあるのです。くたびれることによって初めて得ることのできる喜びもあるのです。これが僕が旅行を続けることによって得た真実です。」

この言葉に共感するフィールドジオロジストはとても多いだろう。AIの回答でわかった気になってしまうこととは対極な世界観である。

『石と人間の歴史』は、野外調査に力点をおく地質学者蟹澤聰史によって書かれた。内容は書名に明確に現れており、人間の営みと岩石との関係が、日本を含む世界的な視野で語られる文化地質学の書籍である。

本書を著すきっかけ・過程は「あとがき」にある。定年後、現役時代の地質調査や巡検等を振り返り、「古い写真やフィールド・ノートを繙いてみると、それまで気付かなかった専門以外のことばかりが目に入った」。そして、気になった点に人文的な理論づけをしていく。

それは思いもよらず、愉快的な営みであったようだ。「生業とは関係のなかった美術史、歴史学、民俗学、あるいは宗教学などに関しては未知の世界で、これらの文献や解説書を読むのは至福の一時であり、こんなにも面白い考え方があったのかと、あらためて自由な時間の楽しさを味わった」。本書はその成果の一部をまとめたものだ。

それにしても、本書で扱われた対象はかなり広い。著者自身が撮影した写真から判断しても、スウェーデン、フィンランド、ノルウェー、英国、ギリシア、イタリア、ドイツ、ハンガリー、トルコ、モンゴル、カンボ

ジア、中国、米国、そして日本。これらの土地へ村上のいう「くたびれること」をいわず足を運んだ。そして実際にその地を踏んだ者だけが表現できる、手触りを感じられる文体で語られる。

時間軸は、地質学的な成り立ちを語る際の地球史、そこで暮らした人たちの営みである人類史・世界史・日本史の尺度が飛び交い、かつ関連しあう。

さらに地質に関してかなりマニアックともいえる内容が扱われ、その上で人の営みのもろもろ（住居、道具、芸術、文学、政治、産業、戦争、宗教など）が縦横無尽に語られる。

対象となる時間・空間といい、トピックスの広がりといい、読者はかなりの知的柔軟性・体力が必要となる。私の場合だけかもしれないが、長時間読み進められず、ほどなくして頭が飽和状態になってしまう。

結果、出版後すぐに2冊求め、自宅と職場の双方の本棚に収めていたが、書評を書こうという踏ん切りがつくまで15年間も要してしまった。

この「噛み応えがある」という特徴は、蟹澤による文化地質三部作、『文学を旅する地質学』（古今書院）、本書、『「おくのほそ道」を科学する』（河北新報社）に共通している。

そのため、たとえば「『ブラタモリ』をみて文化地質に興味をもったから」といって、気軽に本書を手にとることは危険かもしれない。入門とするには、詳細かつ精緻であるからだ。地質学の基礎を学び、かつ強固な目的意識をもって手にして、はじめて生きた読書体験になるものと信ずる。

かつて雑誌が果たしていた役割を、現在は新書が担っているといわれて久しい。時流といえばそれまでだが、本書はそのような「雑誌風」新書とはまったく異なる。

長くお手元におき、ときどき挑戦しては著者の溢れ出る教養に驚嘆し途方にくれる、という付き合い方をお勧めしたい。

（茨城大学 伊藤 孝）

2025.09.19 受付

2025.11.20 学会ニュースレーター公開

2025.11.20 学会ホームページ公開